

131 簡易ホテル弥生 玄関

ずぶ濡れの佐藤が飛び込んで来る。

佐藤、雨を払うとカウンターに近づき、

「警察のもんだが……」

支配人、眉をしそめ、

「はア？」

支配人の細君が、火のついたように泣いている赤ん坊をあやしている。

佐藤「並木春夫と言う男が泊まっているだろ」

★ × × ×

実験劇場バージョン

佐藤「白い麻の服を着た、蒼白い顔の男が泊まっているだろ……宿帳を見せてくれたまえ……」

並木春夫これだよ支配人……」

× × ×

支配人「はい」

佐藤の針のやうにとがった顔が、思わずニヤリとなる。

支配人「六号室です……二階です」

佐藤「ウム……電話室は？」

支配人、玄関脇のボックスを指差す。

佐藤「警察が来た事は言わないようにね」

支配人「はあ」

佐藤「出入り口はここだけかね？」

支配人「え、裏口が一つありますが」

佐藤「鍵は？」

支配人「まだ今日は閉めておりません」

佐藤「閉めて来てくれたまえ！」

支配人、佐藤の強い口調にムツとして鍵を取って去る。

佐藤、電話ボックスへ入る。

支配人「(妻に) おい、いつまで泣かしくんだ……気が変にな

る」

細君「そんなこと言ったって……」

支配人「クソッ！ たまに金廻りのいい客がありや警察種だねだ」

と、去る。

子供、泣き続ける。

細君、子供をあやしなから、

「いい加減におし！ 男の子のくせに……ほら、あそこに

肥ったおじさんがいるだろ。あれ警察のおじちゃんだよ。

言うこと訊かないと監獄へ入れられるから……」

階段を、降りて来た足が、キクツと止まる。

滝のような雨の音。

132 同 電話室の中

（注・昔の電話機で壁にラツパの形をした送話機が

あり手に受話器を持って会話する）

佐藤、思わず大声で、

「ハア……至急……非常手配願います……ハア……ハア……

……じゃどうぞ」

と、電話を切り、またダイヤルをまわす。

133 アパート 管理人室

電話のベルが鳴る。

老人の管理人が、面倒くさそうに受話器を取る。

「はい……え？ そうですよ……え？」

134 弥生ホテル 電話台

佐藤、じれて、

「村上だ！ え？ ム、ラ、カ、ミ、判わからん？……並木の

……並木ハルミの部屋……」

135 アパート 管理人室

老管理人「はア、並木ハルミさんですね？ へえ」

と、出て行く。

外された受話器から、佐藤の怒鳴る声が聞こえる。

佐藤の声「モシモシ……並木じゃない、村上だ！」

136 同 ハルミの部屋

「ハルミさん、電話だよ」

と、老管理人が顔を出す。

村上、キツとなる。その眼がハルミと合う。

ハルミ、部屋を出る。

137 同 廊下

ハルミ、村上、母出て来る。

村上「君、遊佐ゆさから掛かかったんなら……」

母「お前、あの人だったら……」

ハルミ「(村上に)あの人だったら、何て言えばいいの？」

ハルミの眼は涙で溢れている。

138 弥生ホテル 電話室

佐藤「もしもし……」

佐藤、苛いららついて舌打ちをする。

139 同 管理人室

三人、来る。

ハルミ、恐る恐る受話器をとる。

ハルミ「もしもし……ハルミです……え、佐藤さん？」

村上「佐藤？」

140 弥生ホテル 電話室

佐藤「もしもし、村上君を……」

と、電話室の前を、白い洋服が横切る。

佐藤、思わず受話器を離し、電話室から飛び出す。

141 アパート 管理人室

村上が受話器を受け取ろうとしたとき、

カーン、カーン!!

拳銃の発射音。

村上、狂ったように、受話器にかじりつき喚く。

村上「佐藤さん!! 佐藤さん!! もしもし、佐藤さん!! 佐藤さん!!」

村上、ハルミに鋭い声で、

「遊佐の宿屋は!!」

ハルミ「(恐怖の声) アッ」

142 弥生ホテルの 電話室

空しく揺れる受話器。

143 同 玄関

うつ伏せに倒れている、佐藤。

開け放った入り口から、どしゃ降りの雨が吹き込み

苦しむ佐藤に打ち付けている。